第一章　勝道と修験の足跡

粟野は、広い面積を森林におおわれ山が多い地域です。昔から山には神が宿るとされ「山岳信仰」が生まれました。また、こうした山々に分け入り、仏や神のパワーを得ようと修行を積んだのが修験者（しゅげんじゃ）たちです。日光を開山した勝道（しょうどう）は日光修験の祖としてあがめられ、横根山で修行を積んだと伝えられています。

本章では、粟野に残る勝道や修験者たちの足跡をたどるとともに、山岳信仰とも密接な民俗行事を紹介します。

▲横根高原から望む日光連山

勝道もこの景色を眺め男体山登頂の意思を固めたのかもしれない。

山岳信仰と勝道

粟野地域は、その八割以上を森林等の山地が占めており、横根山（一三七三ｍ）をはじめ、粕尾の地蔵岳（一四八三ｍ）、永野の尾出山（九三三ｍ）や三峰山（六〇五ｍ）、入粟野と上久我にまたがる石裂山（八七九ｍ）、清洲の大倉山（四五五ｍ）など多くの山があります。険しい山もあればなだらかな山もあり、こうした変化に富む山々の姿は、人々の精神文化に大きな影響を与え、山を神々が住む他界と考え、まつり、祈願する「山岳信仰」が生まれました。

炭焼きや木材の伐採、狩猟等の生産の場として山から多くの恵みを受けていた粟野の人々の「山の神様」への信仰は特に篤いものでした。

●日光山の成立

栃木県の西北部に連なる日光連山の眺めは、鹿沼や粟野の人々にとって大変なじみ深いものです。皆さんも晩春まで雪を頂く男体山の姿に心打たれた経験はないでしょうか。

仏教が伝来すると、山の神への信仰は人々に根強く受け継がれる一方で仏教思想との融合も進んでいきました。他界である山々が仏や菩薩の住む「極楽浄土」や「補陀落浄土」であると考えられるようになったのです。標高二〇〇〇ｍ級の山々が連なる日光連山は、古くから山岳信仰の対象であり、男体山の頂上付近の遺跡からは、宗教儀式に使う道具や土器などさまざまなものが見つかっています。奈良時代の僧侶・勝道は、男体山を観音菩薩が住むという「補陀洛山」に見立てて登頂し、中禅寺湖を含む日光連山の周辺エリアは、仏教の霊場「日光山」として整備されていきました。

また、神道と仏教が融合した「神仏習合」が進む中、平安時代から鎌倉時代に掛けて、昔から日本にいる神々は仏や菩薩が仮に現れた姿と考える「本地垂迹」の思想が生まれ、日光連山の主峰、男体山・女峰山・太郎山の三神は、それぞれ「本地」（本来の姿）である千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音の仮の姿「日光三社権現」（現在の日光二荒山神社）としてまつられました。

●勝道について

日光開山の祖としてあがめられる勝道について、分かっている史実は多くありません。空海の書いた詩文を集めた『性霊集』に収録され、勝道についての一級の史料とされる「沙門勝道山水を歴て玄珠を瑩く碑并びに序」や勝道の弟子とされる道珍らの『補陀洛山建立修行日記』によって勝道の一生をたどってみましょう。

勝道は天平七年（七三五）に下野国芳賀郡に生まれ、俗姓は若田氏といいました。若くして非凡であり仏道を志した彼は、二

〇歳の頃に家を出て伊豆留や大剣峰の山中で修行を積み、天平宝字五年（七六一）、設置されたばかりの下野薬師寺で、仏教徒が守るべき規則である戒律を授かり正式な僧侶となりました。はじめ厳朝と名乗り後に勝道と改めました。神護景雲元年（七六七）に、二荒山（男体山）への登頂を初めて試みますが失敗し、一五年後の天応二年（七八二）、三度目の挑戦でその頂きに至ったといいます。延暦三年（七八四）には中禅寺湖畔に神宮寺を建てここに数年間留まり修行しました。

その後、上野国（群馬県）で仏教の講義を行う指導者である講師に任じられ、また都賀郡城山に華厳精舎を建立するなど仏教の教えを広めることに努めました。この華厳精舎は、栃木市都賀町の史跡である華厳寺とされているように、かつて都賀郡であった足尾山地の東側の地域には勝道が創建したと伝わる寺院が点在しています。北半田の医王寺は、勝道が夢のお告げに従って発見した薬師如来像を安置するために建てたお堂にルーツがあるといわれています（☞74ページ）。

さらに勝道は大同二年（八〇七）、国司の命令により二荒山で雨乞いを行い、弘仁八年（八一七）に八三歳で亡くなったといいます。

勝道の没後、日光における修験道が確立される過程で修行者たちの勝道への尊敬が高まり、多くの伝説が広がっていったのでしょう。

《参考文献》
鈴木正崇『山岳信仰』中公新書、二〇一五年
小林崇仁「日光開山・沙門勝道の人物像」『蓮花寺佛教研究所紀要・第二号』二〇〇九年
細矢藤策「勝道上人伝(一)」『鹿沼史林・第八号』一九六八年

▲勝道上人坐像（日光輪王寺所蔵）
江戸時代につくられた木像。

修験者たちの修行の場「巴の宿」

●「日光修験」の歴史

古来の山岳信仰と仏教思想の融合をよく表すのが「修験道」です。修験者たちは、山の中を仏や菩薩の住む世界「曼荼羅」とみなし、そこに分け入り、峰々を渡って、山の霊力（験）を得るための厳しい修行である「山林抖擻」を行いました。

日光では、勝道を尊敬する修験者たちがその足跡を追うように修行が行われ、徐々に「日光修験」の形が整っていき、南北朝時代から室町時代に掛けて最も盛んになりました。中世の後半には「三峰五禅頂」という山中での修行法が確立されます。これは冬・春・夏の三回、山に入って行う峰入りの修行と、男体山を中心に秋に五回行う瞑想の修行から成り立ちます。しかし江戸時代になると、「三峰」の内、夏が行われなくなり、「禅頂」も五回から三回に減らされるなど、簡略化・形式化されていきました。そして時代は移り、明治五年（一八七二）の「修験道廃止令」によって日光修験の歴史は終わりを迎えました。

●二つある「巴の宿」

日光修験の修験者たちからあがめられた勝道が修行したと伝わる場所が鹿沼市にもあります。

『補陀洛山建立修行日記』によれば、二〇歳で家を出た勝道が、伊豆留（栃木市出流町）で修行を積んでいたある夜、北方にそびえる大きな剣が突き刺さった山を夢に見ます。勝道が次に向かったこの山こそが「大剣峰」でした。江戸時代の国学者・河野守弘が書いた『下野国誌』収載の「補陀洛山草創建立記」（『修行日記』の異本）には、註として「大剣峰は出流山の北の方十里許日光山より南の方八里余古峰ヶ原の北に当て三里許にあり」と書かれています。古峰ヶ原より北とありますが、この大剣峰は横根山であるとされています。ここでさらに三年間修行した後、下野薬師寺で正式な僧侶となった勝道は弟子たちを連れ、再び大剣峰に戻ります。日光山に関わる古い記録類をまとめた『勅撰日光山縁起』（正徳年間）には、その際巴のように曲がり流れる沢水を目にした弟子たちがこの場所を「巴宿」と名付けたとあります。勝道修行の場と伝わり、日光修験の道場であった「巴の宿」は、二つの場所がその候補とされており、いずれも県や市の史跡となっています。

まず西大芦・草久の「深山巴の宿」ですが、古峰ヶ原高原の足尾境に位置し、やや窪地で周囲には堀がめぐっています。石祠には勝道上人と日本武尊がまつられ、日光修験の修行の拠点として長い間重要な役割を果たしてきました。日光の郷土史家・星野理一郎も著書『日光史』で古峰ヶ原の道場が「巴の宿」であるとしています。

もう一つが、入粟野の「通順坊平巴の宿」です。通順坊平は横根山の中腹部にあり、昔から会津に通じる山道の要所でした。現在は、林業の技術研修施設「21世紀林業創造の森」があります。この史跡には、五輪塔や「石小屋」と呼ばれる洞穴など修行に使われたとされる遺跡が残っています。

出流から入り古峰ヶ原に至る峰入り修行の旧ルートは、江戸時代に入ると、簡略化され直接古峰ヶ原から入るようになります。古峰ヶ原の深山宿が峰入りの第一宿としてその重要性が増していく一方で、通順坊平宿は忘れられていったのでしょうか。

ただし、時を経て出流からの峰入りが全く行われなくなったわけではありませんでした。上永野の不動岳（六六四m）山頂付近に位置し、出流から入って最初の宿である「相沢宿」に残された石祠の銅扉には、延宝四年（一六七六）奉納と刻まれており、近世における出流入りを示す唯一の資料とされています。

《参考文献》
早乙女常郎「日光修験のあしあと（一）」『鹿沼史林・第一五号』一九七六年
宮田登・宮本袈裟雄編（山岳宗教史研究叢書八）『日光山と関東の修験道』名著出版、一九七九年

▲通順坊平巴の宿
鹿沼市史跡（平成８年指定）。史跡内には五輪塔などが残る。

▲上永野相沢宿金剛童子宝殿銅扉
上永野の相沢宿にある石祠に取り付けられていた。扉の裏側に奉納者の名前や年が記されている。

ルーツは日光修験の儀式「発光路の強飯式」

●強飯行事とは

「発光路の強飯式」は正月、妙見神社の例祭の後に執り行われます。祭り当番の引き継ぎ式「頭渡し」に続いて行われ、神の使いである山伏と強力が、高く盛り付けたご飯を集落の人たちに無理やり食べさせる行事です。

栃木県内にはこうした「強飯行事」が数多く伝えられており、その起源については、時を定めて訪れる神や仏をたくさんのご馳走でもてなし食事を共にすることで、穢れを払い福を呼び込むことにあると考えられています。

「発光路の強飯式」は、日光修験の儀式として行われた強飯行事である「日光責め」の流れを汲むといわれ、「日光輪王寺の強飯式」や「生岡神社の子供強飯式」と共通する内容を持っています。発光路では南北朝時代の延文年間（一三五六～一三六〇）からこの行事が行われているといわれており、粟野地域の山岳で修行を積んだ修験者たちがこの地に行事を伝えたのかもしれません。

●強飯式の流れ

一月三日早朝、妙見神社の例祭でお祓いをした後、「頭渡し」の参会者たちが会場（現在は発光路公民館）に集まります。上座には神主や新しい祭り当番である「新太夫」らが座り、向かいに前の当番である「古太夫」とその補佐役である「脇太夫」が座ります。その他、地元議員や市長、教育長、最近結婚した花婿らの客が座ります。子供たちの相伴でお神酒を分かち飲む頭渡しの儀式が終わると、いよいよ強飯式に移ります。

各自の前に高く盛られた小豆飯やイワシ等のお膳が運ばれ、呼び太鼓が打ち鳴らされると、主役である山伏と強力が登場します。山伏は烏帽子をかぶって袈裟衣を羽織り腰に刀を差した姿で金剛杖を手にしています。山伏が操る精霊のような存在である強力は、憤怒の形相の面にワラハチマキを締め、大きなワラダスキを背負っています。

山伏は「拙僧は役行者の末葉、峯渡りの山伏（自分は、修験道の元祖とされる役行者の末裔で、峯を渡って修行をしている山伏である）」と名乗り、日光山で強飯を学びこのめでたい席にやってきたことを告げます。続いて山伏に呼ばれて登場した強力が唸り声を上げながら進み出て、先がＹ字に分かれた木の棒「責め棒」を高く持ち上げ「男体山に三千年立て籠りしこの強力」と声を張り上げます。その後山伏が強力を引き連れ「例年の通り酒なら三十三杯」「湯が五杯」「強飯七十五膳がお定まり、一粒、一菜でも許しはしない」と交互に述べながら、新太夫から順に強飯の儀式を行っていきます。強力は頭を下げる参加者たちの首に責め棒を押し付けながら、花婿には村における

心得、市長には市政への注文など、ほめたりけなしたりさまざまな口上を述べていきます。最後に、中央に進み出た山伏と強力が歌と舞を披露する「オヒラキ」によって行事は大団円を迎え終了となります。

●「強飯」の意味を考える

下粕尾の松崎集落で行われていた「芋まつり」は、味噌煮の里芋をお供えする星宮神社の祭礼であり、かつてこの地域において芋が重要な食料であったことを物語っています。

食べきれない食品が廃棄される「食品ロス」が社会問題になる現代の日本においては考えにくいことかもしれませんが、かつて稲を作ることがほとんどなく狩猟や畑作が中心であった山間地においては、日々の食物を得ることが特に切実な問題でした。大量の芋やご飯などのご馳走を神と人が共食するこれらの行事には特別な意味が込められていたのでしょう。

「一粒、一菜でも許しはしない」という強飯式の口上に耳を傾けてみてください。

※とちぎデジタルミュージアム"SHUGYOKU"(珠玉)(tochigi.lg.jp)で発光路の強飯式の動画を見ることができます。

《参考文献》
柏村祐司『栃木の祭り』随想舎、二〇一二年
下野民俗研究会編『粟野町発光路の強力』粟野町教育委員会、一九八二年
『栃木県民俗資料調査報告書　第一二集（栃木県の強飯）』栃木県教育委員会、一九七七年

◀強飯式の膳

▲発光路の強飯式
山伏と、平伏する参会者を責める強力。

コラム◎横根高原の自然

勝道が修行を積んだとされる「大剣峯」は横根山（標高一三七三m）を指すといわれています。鹿沼市の北西部に広がる横根高原、古峰ヶ原高原、石裂山周辺を含む地域は「前日光県立自然公園」に指定されています。古峰ヶ原から入り地蔵岳、薬師岳を抜けて日光に至る日光修験のルートは現在、ハイキングコースとして整備されています。また公園中央の横根山や井戸湿原を中心とした横根高原には、多くの生き物が生息しています。井戸湿原は三・五ヘクタール程の中層湿原で、ツツジ類や、シモツケ、サワギキョウ、リンドウ等の花々が咲き誇り、まさに植物の宝庫といえます。

横根山の周辺に見られる大きな花崗岩が積み重なる景観は「岩海」と呼ばれ、氷河時代の地形変化を残す貴重な自然遺産として鹿沼市の天然記念物に指定されています。周辺には「座禅岩」や「石小屋」等、修験者たちの修行の場と伝わる巨石があります。岩海が織り成す森の中には、カヤやオニグルミ、クリ等の実がなる木も多く、修験者たちにとって、貴重な栄養源となったことでしょう。『補陀落山草創建立記』には、大剣峯で修行中の勝道の元に現れた化人（人の姿を借りた仏）が美味なる果物を与え、それを食べた勝道は少しも飢えることがなかったことが記されています。

▲井戸湿原

鹿沼市天然記念物（昭和45年指定）。

▲横根山の岩海

鹿沼市天然記念物（平成23年指定）。